
一杯のグラスの中に

辰巳尚来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一杯のグラスの中に

【Nコード】

N7735D

【作者名】

辰巳尚来

【あらすじ】

B A Rと言う大人の空間、そこで出されるグラスの中には色んなお話が詰まったドリンクが注がれる。一杯のグラスの中にある物語を堪能してください。

第一話 ゴットファーザーに魅せられて

30歳を目前にした頃だっただろうか。

初めていったバーで教えてもらった。

いつも行くようなカジュアルな店ではない、オーセンティックなお店だった。

バーテンダーは40代の渋い感じの人だった。

物静かだけど笑顔で話しかけてくれた。

今の会社に入って5年

順調といえば順調だった。

だけど、30歳を前に男として考える事は多かった。

この店に来たのはそんな頃。

店名前が「エイト」だった。

俺は大学まで野球部でセンターを守っていた。

センターの背番号は8番「エイト」だった。

何となく昔の野球していた頃が懐かしく思い扉を開けた。

バーテンダーは一軒の俺を笑顔で迎えてくれた。

その頃バーボンから少しシングルモルトを覚えたぐらいだった。

「グレンリベットをロックで下さい。」

バーテンダーの手つきは今まで行ってた店がなんだったんだと思うくらい、しなやかで素早く綺麗だった。

大ぶりのグラスにダイヤモンドみたいに綺麗に削られた氷

そこに琥珀色の液体が揺らめいていた。

何度も飲んだグレンリベットがまるで別物かと思うくらい美味しく感じた。

「いつもスコッチウイスキーですか？」

「いえ、最近覚えたばかりです。」

店内に流れるBGMはスタンダードジャズだった。

バーって酒飲んで大声で馬鹿話する所だと思っていた。

ここでは自然と話すトーンは落ち、言葉使いも変わった。

でも、それがが窮屈だとかしんどいとかは不思議に思わなかった。

「店の名前は どうして エイト なんですか？」

俺の直感は正しかった。

バーテンドーいや、マスターは学生時代野球をやっていてポジションはセンターだったらしく、その背番号8からとった名前だった。野球繋がりはその後の話を弾ませた。

2杯飲んだあと、締めめの1杯はマスターにお任せした。

ロックグラスが用意されたので、ウィスキーが出て来るのかと思っていた。

マスターはミキシンググラスを取り出し、バーボンとリキュールを手を取った。

その美しい手捌きに思わず見とれた。

ミキシンググラスから注ぎ出された液体はキラキラ輝いているみたいだった。

「ゴットファーザーです。」

カクテルと言えばジントニックくらいしか飲んだ事なかったので、少し戸惑った。

グラスを持ち、香りを嗅いだ。

バーボンの香りの中に甘いいい香りがした。

一口飲んだ。

「美味しい！」

思わず口から言葉が出た。

バーボンの強さの中にフルーツの甘さとは違うナッツか何かの甘味が口いっぱい広がる。

凄く大人のカクテルって感じがした。

「バーボンにアマレットのシンプルなカクテルですがいかがですか？」

「美味しいです。で、アマレットって何ですか？」

「イタリアを代表する杏の核のリキュールです。」

カクテルがこんなに美味しいとは思ってなかった。

甘さにも色々あるものだとしみじみ考えていた。

何だか大人になった気もした。

それからその店に度々足を運んだ。

毎回、最後の一杯は「ゴットファーザー」だった。

マスターからカクテルの事も色々聞いた。

1972年、映画「ゴットファーザー」が公開されて程なく出来たカクテルで、ウィスキーとイタリアを代表するリキュール「アマレット」で作られたシンプルなカクテル

行きたびにバー、そしてバーテンダーの魅力にみせられていた。

カウンター一枚向こうの人がまるで別次元の人に思うほどだった。

30歳を前に悩んでいた小僧にこのカクテルは勇気と希望をくれる気がした。

「このカクテルの意味わかる？」

マスターからの問い掛けに首を傾げた。

「ゴットファーザーだから強さとか、権力とかじゃないですか」

「もちろんそれもあるかもしれない、でも1番は家族愛だよ。」

「家族愛？」

マスターは映画を見るように言った。

確かに見た記憶はあるけど、真剣に見た記憶はなかった。

次の休みに一気に見た。

マフィアの映画には違いなかったが、アメリカで生きるイタリア人達

確かにそこには、違う国で必死に生きるイタリア人達が仲間や家族を守り、守られ行きれ生きて行く。

喜びも悲しみも全て。

翌日、「エイト」で俺は驚くほど饒舌に喋っていた。

マスターは笑顔でそれを聞いてくれた。

映画「ゴットファーザー」にもカクテル「ゴットファーザー」にもどっぷりハマってしまった。

一人で行く事が多かったが、たまに気の合う友人や同僚と訪れた。

「へえ、洒落た店に来てるんだなあ。高いんだろ？」

高い？何をもって高いと言うか？

確かに家で缶ビールでも淋しく飲むんだったら、安く済むだらう。

でも、それでは味わえない物がここにある。

仕事で疲れた時、悩んだ時、ここにすれば明日も頑張ろうと言う気にさせる何かがある。

「お前もこういう行きつけのバー持つといいよ」

かなり大人になれた気がした。

通いだして一年くらいたった頃だった。

俺は初めて彼女を連れて行った。

女性を連れて来る事には俺なりの基準があった。

大人の女性である事！

彼女とは四ヶ月前から付き合いだした。

年は3つ下、かなりのキャリアウーマンだったがツンとした感じでは無かった。

いつもの様にマスターの笑顔と会話で俺達は和んだ。

「飲んで欲しいカクテルがあるんだけど」

「何？」

マスターにオーダーした。

もちろんあのカクテル。

「ゴットフアーザーって言うカクテルなんだ」

彼女が飲んでどんな反応するか楽しみだった。

「おいしい、これ」

素直に嬉しかった。

彼女に色々説明した。何でこのカクテルなのかとか、このバーに来る理由だとか。

「以外な一面だね。でも連れて来てくれてありがとう。」

僕はこの時決めていた。

この店でゴットフアーザーを飲んでおいしいと言ってくれたら結婚しよう！

それから数カ月後、俺達は結婚した。

豪華では無いが披露宴もした。

みんなに祝ってもらい嬉しかったが中でも、マスターがわざわざカクテルを作りに来てくれた。

俺には「ゴットフアーザー」そして彼女にはベースをジンに変えた「ゴットマザー」だった。

何とも意味深なマスターのプレゼントに俺は感無量だった。

あれから何年かたった、俺にも子供が出来た。

今は家族がある。

たった一杯のカクテルとバーに出会い、俺は変わった。

大人になる事を学び、家族愛を知った。

今だに「エイト」には通っている。

あいつも変わらず最後の一杯は「ゴットフアーザー」

俺はゴットフアーザーになれるだろうか？

いや、もうなっている。

だって家族愛を知っているから。

ホワイトレディーの誘惑

そのカクテルは僕にとっては魔性の女だった。

出会いは5月、友人に連れられて行ったバーだった。

「ここはカクテルが美味いから何か頼めよ」

そう言う友人はサイドカーを注文した。

別にカクテルを知らない訳ではないけど、何と無く迷ってしまった。

「ジンで何かお願いします」

迷った時の正しいオーダーの仕方だった。

「かしこまりました。」

シガーが漂う重厚な店内、バーテンダーはそう言うのと軽快な動作でカクテルを作りだした。

ジンはビイファイターだった。

次々にシェーカーに材料を入れ、小気味よく振った。

そしてよく磨きあげられたカクテルグラスに何とも美味そうな液体が注がれた。

「ホワイトレディーです。」

何度か飲んだ事はあった。

グラスに口をつけると、ジンの柔らかい香とグレープフルーツの様な甘酸っぱい香が鼻孔を刺激した。

一口飲んだ瞬間、稲妻が走った。

「う、美味しい！」

「だろう、ここのバーテンダーはいい腕してる」

友人は得意げに話し、サイドカーに口をつけた。

確かに甘酸味のバランスが絶妙だった。

「何でもバランスだよ」

仕事に遊びに恋愛に、何か一つが崩れても駄目になる。

友人がここへ僕が連れてきた理由が何と無くわかった。

「カクテルって決まった分量入れたからって美味しく出来る訳じゃないんだぜ」
わかった様事を言ってくれる。

確かに、仕事ばかりで私生活には支障がてていた。

一年前に昇進した。異例のスピード出世だった。

それが本当の力だと思わせる為に必死で働いた。

「カミさん大事にしろよ」

友人の言葉は重く突き刺さった。

バランスは大切だ。

それからホワイトレディをよく飲んだ。

見た目白いカクテルは、飲んだ瞬間に色んな色をだす。

この一杯を飲む為に、仕事を早めに切り上げた。

少しずつ自分のバランスが出来てきた。

「ここはカクテルが美味しいから何か作ってもらえよ」

僕は妻にいつてホワイトレディを注文した。

「私も同じもの下さい」

バーテンダーは素早く二杯のホワイトレディを作った。

店内に響くシェイキングの音が二人の沈黙を救った。

「美味しいだろ」

「本当に美味しいわ」

「気付いたんだ」

「何に？」

「バランスだよ」

「バランス？」

「ごめんな」

「いいのよ」

妻は笑顔でホワイトレディを見つめていた。

「あなたを誘惑したのが、このレディでよかったわ」

確かに僕はこのホワイトレディに誘惑された。

そして気付いた。

バランスが大切だと…

ソルティードックの勇気

そのカクテルは僕に大きな勇気をくれた。

シーズンは始まっていた。

僕は今年も二軍スタート

「いらっしやいませ」

チームメイト行きつけのバーだった。

「こいつにあれ作ってやって！」

バーテンダーはおもむろにグラスに何かをつけ、シェーカーを取り出し、生のグレープフルーツを絞り入れた。

「おまえは一軍スタートでいいよな」

「大丈夫だよすぐ上がって来れるさ」

才能が無いわけではないと思っていた。

「お待たせしました。ソルティードックです。」

何だソルティードックか、と思った。

「ん？これがソルティードック？」

「どうだ、ここのは美味いだろ」

美味かった。他で飲むソルティードックとは明らかに違っていた。

バーテンダーは何も変わった物を入れてませんと言った。

ウオッカとグレープフルーツ

なのに口あたりはマイルドで凄いフレッシュ感がある。

チームメイトが話してくれた。

このお店のバーテンダーの師匠がソルティードックの美味しい人だった。

それに惚れ込み、研究し練習した。

その結果、彼にとって、バーテンダーにとってそのソルティードックは伝家の宝刀になった。

だから今、やっていける。誰にも負けない伝家の宝刀をもってるから。

「お前が一軍に上がって来れない理由はそこじゃないか」

グサツときた！

確かに、全体的にはいいのかもしれない。

ただ、これが特にいいと言うのは無かった。

伝家の宝刀

翌日から考えた。

自分が野球を始めた頃の気持ちを。

当時人気のあったリリース。

剃刀シュートが売りだった。

次々に打者のバットをへし折る。

痛快だった。

自分もシュートを覚えた。

理想はバットをへし折るくらいの切れ味。

しかし、剃刀までにはならなかった。いや、しなかった。

これかもしれない！

事あるごとにあのバーでソルティードックを飲んだ、そしてバーテンダーにどうやって近づけたかを聞いた。

毎日、シュートを極める事に没頭した。

少しだが試合で成果をだしてはいた。

「まだまだです。あのシュートにはならない」

頭を抱えた僕にバーテンダーは言った。

「私はね、師匠のソルティードックに近づける為に、分量や素材はもちろん、注ぎ方や振り方、ときには喋り方までまねしました。」
物真似はいっしか本物になるかもしれない。

「私のソルティードックは美味しいと評判になった。でもね、師匠のお客様は師匠のそれとは違うと言った。」

バーテンダーは饒舌に話した。

「師匠のソルティードックを目指した努力は、いっしか僕のソルティードックになったんです。」

最初、意味がわからなかった。

そうか！目指したものは全く同じには、ならないが、それは僕のシュートになっている。

そういう事か！

確かに、最近の決めの一球は自信を持ってシュートだった。

努力は人を裏切らない。

そういう事か。

うだうだ悩まなくなった。

シュートの研究、努力は怠らなかった。

何時しか他の物まで良くなってきた。

「一軍昇格おめでとうございます。」

出されたカクテルは『ソルティードック』

このカクテルに出会い、磨きをかける事を思い出した。

思い描いたものに近づける。えてしてそれには成らないかもしれない。

でもそれは自分の物になる。

そして、伝家の宝刀になるやもしれない。

挑み続ける事！それを忘れてはいけない。

最後の最後まで。

感激のモヒート

汗がワイシャツの首を締め付けるかのようにまとわりついている。

社会人になって2年が経つ。随分と外回りにも慣れたが、この夏の暑さだけは慣れない。

得意先から得意先に移動する時に、時間があればカフェに入って冷たいアイスコーヒーなど

飲む事こともしばしばあった。

そんなある暑い日にそのカクテルに出会った。

その日は繁華街を歩いている時に見つけた看板に吸い寄せられる様にその店に入った。

「いらっしやいませ」

30過ぎのベストに蝶タイのマスターが笑顔で迎えてくれた。

「昼2時からオープンってめずらしいですね」

俺はそう言うと8席ほどあるカウンターの窓側に腰を下ろした。

15坪ほどの大きさの店内には一面に大きな窓があった。

燦々と降り注ぐ日光がBARと思えない店内の明るさを出していた。

「ビールもらえますか」

「かしこまりました。」

昼間とはいえ、この暑さではビール一杯飲んだところで汗ですぐに出ています。

さすがに仕事中とはいえ罪悪感はまったく無かった。

ボサノバが店内をゆったりとした雰囲気になっていた。

マスターとの会話も心地良く、昼酒の醍醐味を味わってる感じがしていた。

暑さで仕事の気力はほとんど失せていた。

黒板におすすめが書かれているのが目に入った。

『モヒート』

「何ですか。モヒートって？」

「フレッシュミントを潰してラムと砂糖を入れたキューバで有名なカクテルです。」

聞いた事はある気がしたが飲んだことは無かった。

実際、酒は飲むがBARといってもTシャツにジーンズでやってる様なカジュアルなお店にしかいった事が無い。

「うまいですか？」

愚問だった！

「暑い日には最高ですよ！ミントと言ってもフレッシュの爽快感は違いますかね」

ビールが残り少なくなっていたので、飲んでみる事にした。

大ぶりのグラスにフレッシュミントを入れてなにやらすりこ木の様なもので潰しだした。

そこに、ホワイトラムをたっぷり入れた。

マスターの手つきは鮮やかでつつい見とれてしまった。

粉砂糖を入れるとクラッシュアイスをいっぱいに入れてかき回し、最後にソーダを少し入れた。

ストローが刺さって、俺の前に差し出された。

作っている時からミントのいい香りが漂っていた。

「うまい！」

つつい口に出してしまった。

暑さでイライラしていた感があったのに、一口飲んでその爽快感に気持ちが変わった気がした。

たっぷりのラムが入ってるのできついはずだが、それも感じさせない！

フレッシュミントの香りはまさにリラクゼーション効果があるかの様だった。

「この時期は最高ですね。ミントがいい状態でしかつけないですからね」

マスターとその後モヒートの話をした。

作り方もさまざまでそのお店やバーテンダーによってかなり違いがあるので、店ごとで違ったモヒートが飲めると言うような話だった。

仕事の途中で暑さに嫌気がさしていた気持ちがたった一杯のモヒートで変わった。

表も昼2時からオープンの看板が無ければ、このモヒートとの出会いも無かっただろう。

それから、気持ちが萎えかけた時は「モヒート」を飲む事にした。

季節感！その季節に何故その物があるのか？それは意味があるから！

一年通して飲める物あるが、その季節だからいい物もある。

四季のある日本の楽しみ方！

夏には夏の物を楽しむ！

暑くなってきたら迷わず「モヒート」それが俺の夏の季節感だ！

ダブルマチュワードの時間

男は携帯電話を切って無造作のポケットにしまった。

彼女との電話の内容は男をイラつかせていた。

「まったくあいつは何考えているんだ！」

つつい独り言が飛び出す始末だった。

男は一軒のバーの看板を見つけた。

『Ray』

イラつく自分を落ち着かせる為に扉を開けた。

「いらっしゃませ」

店内はジャズが流れていた。装飾品もジャズの名盤のジャケットやサックスなどで彩られていた。

「ハイボールください。」

男はカウンターの隅に座った。他の客は3人。

静かに流れるジャズは少し男の気持ちを落ち着かせた。

「お待たせしました。」

目の前にハイボールが出された。

レモンピールが効いているせいか、驚くほど気持ちがリラックスした。

「お待ちあわせですか？」

マスターらしき40代半ばのバーテンダーが聞いてきた。

「いえ・・・」

短い返答だった。

「ごゆっくりしてください」

男はさっきの彼女との電話のやり取りを思い返していた。

彼女とは付き合って4年になる。

3つ下の彼女は時に可愛らしく、時にわがままな一面を見せる。年齢的にもそろそろ結婚を考えなければいけない頃だった。

男は気持ちを固めてその方向で話を進めようと考えていた。

ところが、彼女からの電話は1年間のアメリカ留学だった。

付き合いだした頃から自分勝手な所はあったが、それも可愛いと思っていた。

しかし、今回は自分との気持ちのずれに少しイラついた。

なぜ、今なんだ！

二杯目を注文しようとしたとき、カウンターのの上に置かれたボトルが目に入った。

「バルベニーダブルマチュワード」

知らないお酒だった。

「それは何ですか？」

待ってましたとばかりにバーテンダーはお酒を手にも男の前にやってきた。

「これはスコッチウイスキーですが、二種類の樽で寝かせた別々のお酒を1つにした物です。」

まるで結婚したお酒みたいだと思った。

「じゃ、それをロックでください。」

バーテンダーは慣れた手つきでグラスに氷を入れてお酒を注いだ。

トロトロとボトルから流れ落ちる琥珀色の液体は、美味しいそうに見えた。

「シェリーとポートに違う個性の樽で寝かされ物ですが、最後に一緒に違う樽で寝かせます。」

それぞれの個性が交じり合って新しい個性を生む！素晴らしいお酒ですね」

バーテンダーの言葉が何故だか重く感じた。

違う個性が交じり合って新しい個性を生む！

なかなか難しい事だ。

世間では水と油は交じり合わない代名詞。

男は彼女と自分について考えていた。

自分がイラついているのは、自分の方が勝手な思い違いなのかもしれない？

彼女の今までの人生と自分の人生！

「ダブルマチュワードか」

「これは何年物ですか？」

「12年です。」

12年かぁ、男は一人笑った

「どうかしましたか？」

「いえ、まだまだだなあって思って、これ美味しいです。」

「ありがとうございます」

彼女とはまだ4年、マチュワードにはまだまだかかるかもしれない。
男はじっくりウィスキーを味わった。

もうと考えるかまだと考えるか、時間は永遠ではないがそれほど短くもない。

いつになったらいい状態になるだろうか？

12年までにはまだまだあるなあとグラスの琥珀色を眺めたいた。
じっくり生きましよう。そう思ったカウンターでの夜だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7735d/>

一杯のグラスの中に

2010年10月9日19時39分発行